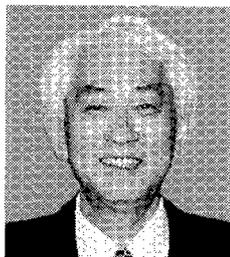


足利健亮先生を悼む

足利健亮先生が1999年8月6日、癌に起因する急性循環不全のためご逝去になった。豊饒なるアイデアと斬新な研究テーマを携えて。また、丸4年もの間研究科長としてその整備・充実に奮闘された京都大学大学院人間・環境学研究科などでの教育の再開を夢見られたことだった。無念の思い如何ばかりだったかと、断腸の思いに駆られる。



研究室にて
1998年12月24日撮影

1968年以来、長きにわたって評議員として貢献されてきた本学会にとっても、人文地理学・歴史地理学の世界にとっても、かけがえなき先生を失った悲しみは限りなく深く打撃は言いようもなく大きい。ここに先生の経歴と業績を振り返り、先生の存在の大きさの一端をかみしめたく思う。

先生は1936年北海道勇払郡追分町にお生まれになり、1955年に「自由の天地へ脱出を！」というわけで京都大学文学部に入学された。中学・高校時代既に、後の優れた歴史地理学者、美文家としての片鱗明らかな作品を著しておられる。尤も、入学時には「地理を専攻する積り」などお持ちでなかったのが藤岡謙二郎先生との出会いと「強してお誘い」によって人文地理学を専攻されることとなった。そして、北海道を歴史地理学から論じる際の不可欠な問題に関する優れた卒業論文(後『人文地理』に掲載)を執筆された後大学院に進まれ、日本の古代歴史地理研究に取り組みされた。

足利地理学の本領が発揮された実に先生らしい斬新で鋭い着想に満ちたその成果(修士論文)は、1985年に刊行されて京都大学文学博士の学位を受けられた大著『日本古代地理研究』の重要な一部をなすこととなった。当初、古代歴史地理学研究者の間でもその慧眼を是とする人の少なかった、古代官道が直線的計画道路であったとの卓見や、この計画道路網を、恭仁京や平安京をはじめとする宮都の広がりに関する創見や条里制と絡め土地

計画の問題として纏められた本書の画期的だったことは今更言うまでもない。日本の古代国家観にも変革を迫り、新しい学際的学会を生んだ。

1962年、博士課程在学一年にして教養部助手になられた先生はその後、追手門大学(1966~68年)、大阪府立大学(1968~74年)を経て、京都大学教養部に戻られたが、1984年には助手時代に着手された京都を中心とする都市史研究をこれまた独創的な『中近世都市の歴史地理』として纏められた。学位論文の副論文とされた本書は先生のご研究の第二の柱であり、時代の幅を中近世にまで広げ、かつ地図化の重要性と「過程の歴史地理」の醍醐味を活写した名著であったが、今一つ注目すべきことは、ここから、権力者の書かれざる思想の解明を歴史地理的手法を用い歴史地理学の問題として行うという先生の斬新なご研究の第三の柱を生成発展していかれたことである。人間不在の人文地理学に対する鋭いメッセージでもあった。

学位授与の翌年の1986年に教授に昇任された先生は、1992年には上記人間・環境学研究科に移られ、歴史空間論を担当されたが、この間、1993~97年には同研究科長、京都大学評議員を務められつつ、激職の間を縫ってそれまでのご研究の成果の取り纏めにも努められ、『考証・日本の古代空間』(1995年)を上梓されたり、NHK人間大学に登壇されて、語りとテキストを通して地理学・歴史地理学の面白さと足利地理学の魅力を汎く伝えられた(1997年)り、京都研究・都市史研究・地図学の成果としても正に画期的な編著『京都歴史アトラス』(1994年)を公刊された。上記した三つの柱に対応する三部作でもあった。足利地理学の魅力は、人間大学のテキストを増補して出された名著『景観から歴史を読む』(1998年)に如何なく発揮されているが、先生は近い将来その魅力を、書物を通して再び味わえる機会を我々に遺していった。地図、特に地形図を読み解く先生の天才的才能を受け継ぐことは容易でないが、300編に近い膨大な作品から先生の知の営みを振り返り発展させていくことは我々の責務であろう。心からご冥福をお祈り申し上げます。(金坂清則)